

研究ノート

学生ボランティアに関する一考察（１）

Considering Student Volunteer Workers（１）

石 黒 康 子 関 好 博 大 門 信 吾 武 藤 憲 夫
 ISHIKURO Yasuko, SEKI Yoshihiro, DAIMON Shingo and MUTOU Norio

Ⅰ はじめに

本学は、文部科学省の平成19年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に選定された。全国の大学・短期大学・高専1,254校の中で、選定は70件であり、本学は北陸の短期大学で唯一の選定校となった。

プログラムの名称は「地域をキャンパスとした人間力向上の取組み」である。この取組みの理念は、地域への社会参加活動を通して学生の人間力の向上を図り、一人ひとりの将来の夢や就職を支援するために、学生支援・課外活動支援・進路支援を一体的に位置づけ、全学的な体制で展開する学生支援の取組みである。

取組みの内容は、「ボランティア・地域活動センター」を開設し、１．本学４学科・１専攻科による特色ある活動プログラム開発事業 ２．ボランティア・地域活動センター運営事業 ３．地域参加活動事業を推進するものである。

具体的な内容は、平成19年11月22日に「ボランティア・地域活動センター」を学内に開設し、学生用にボランティアに関する書籍を整備した。さらに、「ボランティア・地域活動センター運営委員会」や「地域フォーラム」を開催して、県内の福祉施設や地域住民の方々に周知を行った。

また、学生のボランティア活動の状況や学びを把握するために「Webボランティア手帳」のシステム開発をおこなったうえで、教職員や学生にWeb上でのボランティアへの参加登録や活動記録の管理方法等の説明会を実施し、新年度からのスタートに向けた。

平成20年４月には、「ボランティア・地域活動センター」が本格的な活動を開始したことで、県内各地からさまざまなボランティアの依頼があり、平成20年10月15日現在で294件にのぼる活動情報がWeb上で公開されている。

現在、本学で行われている学生のボランティア活動には２種類あると考えられる。一つは、福祉施設や各種団体からの募集依頼に対して参加学生を募る「請負型」である。もう一つは、本取組みの特徴である学科の専門性を生かした活動を企画し、地域に提供

いしくろ やすこ せき よしひろ（福祉学科）
 だいもん しんご（経営情報学科） むとう のりお（幼児教育学科）

する「提案型」である。

本研究の目的は、これらの活動の実施状況を報告するとともに、活動のあり方や課題を継続的に検討することによって、本取組みの理念の具現化を推進することにある。

この研究を進めるにあたり本稿では、平成20年4月から9月までの「請負型」ボランティアについて、調査した結果を報告する。

Ⅱ 方法

1. 調査内容

- (1) 平成20年度、前半6カ月間におけるボランティア依頼件数及び参加件数
- (2) 学生ボランティアの参加内容
- (3) 学生によるボランティア実施後のアンケート結果
- (4) ボランティア受入先による実施後のアンケート結果

2. 調査時期

平成20年10月初旬～中旬

3. 調査方法

4月から9月までの「請負型」ボランティアについて、本センターへ依頼のあった件数と学生が参加した件数をまとめた「ボランティア受付一覧」を基に、月別及びボランティアの種類別に分類し、依頼件数、参加件数、参加者数、学科別参加者数について集計を行う。また、ボランティア実施後の学生がWebボランティア手帳に書き込んだアンケート及び受入先から送られた実施後のアンケートについても集計を行う。

なお、学生がボランティア活動に取り組むまでの手順は、以下のとおりである。

4. 学生がボランティア活動に取り組むまでの手順

Webボランティア手帳登録から活動後のレポートやアンケートの書き込みまで

- (1) 「ボランティア・地域活動センター」には、センター事務員が一名配属されており、学生とボランティア受入先との窓口になり支援している。
- (2) 学外からボランティアの依頼があれば、「富山短期大学ボランティア受付票」をFAXで受入先に送る。活動名や実施日、募集人員等を記入してFAXで送り返してもらう。
- (3) ボランティアの依頼があったものから、順次Webボランティア手帳に入力を行う。
- (4) 学生はWebボランティア手帳で確認し、希望する内容に登録をする。
- (5) センター事務員から受入先に応募状況について連絡する。
(その際に、ボランティア実施後のアンケート記入依頼を行う。)

- (6) Webボランティア手帳に登録されたならば、センター事務員から詳細にわたって説明・連絡が行われる。
- (7) 学生ボランティアが決定したら、ボランティア受付一覧へ学科別に参加学生数及び担当教職員の名前が記入される。
- (8) ボランティアの参加がない場合は、センター事務員より連絡を受け、該当学科のセンター委員やクラス担任が学生に参加を促す。(但し強制はしない)
- (9) 結果的にボランティアの参加がなかったら、直ちに受入先へ丁重にお断りをする。
- (10) ボランティア終了後、学生はWebボランティア手帳に学びや感想、実施後のアンケートを書き込む。
- (11) 担当教職員は、学生の書き込みを見てコメントやアドバイスを書き込む。

Ⅲ 結果及び考察

1. 学生のボランティア状況

(1) 月別ボランティア依頼・参加件数

表1 月別ボランティア依頼・参加件数一覧 (単位：件)

項目 \ 月別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	6カ月間の合計
ボランティア依頼件数	5	18	28	51	87	36	225
ボランティア参加件数	4	9	15	11	43	17	99
ボランティア不参加数	1	9	13	40	44	19	126
ボランティア参加率	80.0%	50.0%	53.6%	21.6%	49.4%	47.2%	44.0%

表1は、平成20年4月～9月までの6カ月間における「請負型」ボランティアについて、依頼件数を月別にまとめ、学生の参加状況を示したものである。依頼件数では7月・8月が多く、夏休み期間でもあり「イベント」や「納涼祭」等の施設行事が多く催され、6カ月間で225件にのぼった。

ボランティアの参加率については、6カ月間の平均が44.0%と半数に達していない現状である。特に、7月の参加率が21.6%と低かったのは、本学の前期期末試験があったことや、実際には平日のボランティア依頼もあり、学生は授業のため参加できない状況であったことが理由として挙げられる。

2. 学生ボランティアの参加内容

ボランティアの月別及び内容別の依頼件数についてまとめたものが表2、同じく参加件数については表3に示した。

表2 ボランティアの月別及び内容別の依頼件数 (単位：件)

ボランティアの内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計(割合)
子ども向け		5	11	10	11	12	49 (21.8%)
市民向け	4	11	11	17	40	8	91 (40.4%)
施設内行事	1	2	2	19	25	10	59 (26.2%)
施設外行事			1	1	4	3	9 (4.0%)
その他			3	4	7	3	17 (7.6%)
合計	5	18	28	51	87	36	225 (100%)

表3 ボランティアの月別及び内容別の参加件数 (単位：件)

ボランティアの内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計(割合)
子ども向け		1	4		4	3	12 (12.1%)
市民向け	3	6	5	4	21	6	45 (45.5%)
施設内行事	1	2	2	4	12	5	26 (26.3%)
施設外行事			1		2	1	4 (4.0%)
その他			3	3	4	2	12 (12.1%)
合計	4	9	15	11	43	17	99 (100%)

表4 ボランティアの月別及び内容別の参加者数 (単位：名)

ボランティアの内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計(割合)
子ども向け		1	15		18	12	46 (9.9%)
市民向け	25	20	41	40	68	26	220 (47.4%)
施設内行事	1	4	4	11	24	15	59 (12.7%)
施設外行事			1		6	1	8 (1.7%)
その他		60	20	17	23	11	131 (28.2%)
合計	26	85	81	68	139	65	464 (100%)

(1) ボランティアの内容別にみた依頼及び参加状況

ボランティアの依頼については、その内容はさまざまで、大きく「子ども向け」「市民向け」「施設内行事」「施設外行事」「その他」の5つとした。最も依頼が多かったのは「市民向け」で全体の40.4%、次いで「施設内行事」が26.2%、「子ども向け」が21.8%の順であった。これに対して参加した内容も「市民向け」が最も多く、全体の45.5%だった。次いで「施設内行事」が26.3%、「子供向け」「その他」が12.1%であった。なお、ボランティア依頼の内容について種類別にまとめたものが表5である。

表5 依頼ボランティアの種類とおもな内容

ボランティアの種類	ボランティアの内容
「子ども向け」 一般の子ども対象の 行事運営補助	運動会、バザー、児童館祭、キッズボランティア
「市民向け」 市民向けイベント 運営補助	スポーツ大会の補助、パークゴルフ、ゲートボール、ボーリング大会 フォーラム、記念祭、スポーツ少年大会
「施設内行事」 施設(内)の 行事運営補助	福祉施設の話し相手、納涼祭、夏祭り、敬老会、秋季祭 喫茶ボランティア、運動会
「施設外行事」 施設(外)の 行事運営補助	天使の翼、社会見学、買い物学習、バスハイク、料理教室、お菓子作り、 絵本の読み聞かせ
「その他」	献血受付、講座補助、学科に関するもの

(2) ボランティアの内容別にみた参加者状況

ボランティアの月別及び内容別の参加者数についてまとめたものが表4である。

参加者数については、「市民向け」が全体の47.4%と半数近くを占めていた。次いで、「その他」が28.2%、「施設内行事」が12.7%と続いた。

ボランティア依頼の人数は、内容により1名から200名以上と幅広く、平均して2～4名で、イベントの補助ともなると複数の依頼になる。そのため、「施設内行事」の参加依頼は2名か多くて4～5名で、参加者数としては全体の13%にも満たない状況であった。

(3) 学科別にみたボランティア参加者状況

表6は、月別にみた学科別のボランティア参加者数である。

表6 学科別参加者数

(単位：名)

学科別 月別	食物栄養学科	専攻科	幼児教育学科	経営情報学科	福祉学科	合計
4月	6	0	3	7	10	26
5月	5	0	3	13	64	85
6月	12	3	9	10	47	81
7月	7	0	29	0	32	68
8月	18	1	38	16	66	139
9月	14	3	16	21	11	65
合計	62	7	98	67	230	464
全学生数	172	26	191	217	142	748
割合	36.0%	26.9%	51.3%	30.9%	162.0%	62.0%

本学におけるボランティアの取組み状況については、紀要第43巻（1）92ページで宮田氏の報告のとおり、以前は、福祉学科以外は低調であった。「ボランティア・地域活動センター」の開設によって、「請負型」ではあるが、本学全体で前期だけでも62.0%の学生が参加したことはかなりの成果といえる。

但し、これは延べ人数であり、実際には、学生一人で多数のボランティアを経験している者もいれば、未だに1回も参加していない学生もいる。10月の教授会で学生ボランティアの実績について参加率を約36%と報告しているが（一人が何回参加しても複数回数には数えず）、70%台に上るよう学生の参加を促すことが求められる。

ボランティア活動の特徴として、自発性・主体性・社会性・無償性などが挙げられるが、さまざまな人々との共同体験により、社会性や協調性を養いながら人間として成長していく効果が期待されるだけに、学生の積極的な参加を促していきたい。

3. 学生によるボランティア実施後のアンケート結果

学生がボランティアに参加後、Webボランティア手帳のアンケートに答えた結果をまとめたものが表7である。なお、参加した学生464名中355名がアンケートに答え、回収率は76.5%であった。自由記述については、ごく一部を取り上げ列記した。

表7 学生ボランティア実施後のアンケートの結果 (単位：名)

1. 参加しての感想や活動・内容への満足度	(1)非常に良かった (2)まあまあ良かった (3)どちらともいえない (4)あまり良くなかった (5)とても悪かった 計	178 (50.1%) 149 (42.0%) 20 (5.6%) 7 (2.0%) 1 (0.3%) 355 (100%)
2. 次また何かボランティア活動に参加したいと思うようになったか	(1)ぜひ参加したい (2)できるだけ参加しようと思う (3)よくわからない (4)できればもう参加したくない (5)絶対参加したくない 計	153 (43.1%) 178 (50.1%) 20 (5.6%) 4 (1.1%) 0 (0%) 355 (100%)
3. 活動に参加しての感想(複数回答)	(1)短大での学習を活かしたり、試したりすることができた (2)学生らしい活動で、プログラムや周囲の参加者に活気を与えることができた (3)感謝されたことで、自信や励みになった (4)身近な地域社会のことを知ることができた (5)その他 合計	93 (18.1%) 85 (16.6%) 148 (28.8%) 164 (32.0%) 23 (4.5%) 513 (100%)
4. 活動に参加しての要望や苦情(複数回答)	(1)単なる人手不足の補充 (2)明確な指示や説明がない (3)学生ボランティアとしての内容が疑問あり (4)トラブルやアクシデントがあった (5)その他 合計	22 (6.0%) 85 (23.4%) 33 (9.1%) 3 (0.8%) 221 (60.7%) 364 (100%)

学生によるボランティア実施後の自由記述

《良かった点》

- ・子どもから高齢者まで幅広い人と関わることができた。
- ・人の温かさを知ることができた。
- ・スタッフの皆さんがとても優しくてやりやすかった。
- ・担当者や他のサポートスタッフの方々のおかげで楽しく活動することができた。
- ・選手の方たちや、サポーターの頑張る姿に励まされた。
- ・お年寄りに、いろいろアドバイスをしてもらい元気が出た。
- ・今まで接することのなかった障害者の方に接することができて良かった。
- ・障害者の方の一生懸命な姿を見られて良かった。
- ・障害者の方とふれあう機会ができた。
- ・普段、見られない親子の様子を見ることができて良かった
- ・車いすの扱い方などを知ることができて良かった。
- ・保育所と地域とのふれあい、保護者の方との連携が見られ勉強になった。

- ・「また来てください」と利用者の方に言ってもらったことや、名前を覚えてもらったことが嬉しかった。
- ・日頃の学びを生かせるボランティアであった。
- ・職員の方が一日の流れやケアプランについても説明してくださり、とても分かりやすかった。
- ・私たち学生に経験として、役割を探してくださった。
- ・全国子ども達とふれあう貴重な体験になった。
- ・今回のボランティアを通して、初めてイベントの裏側というものを見ることができ、たくさんの新たな発見をすることができた。
- ・自分のコミュニケーション力を試せた。

《悪かった点》

- ・コミュニケーションが難しかった。
- ・「次回もお願い」だけの挨拶しかなく、活動内容も不明確だったので、次回は参加する気にはなれない。
- ・学校で言われた内容と、当日会場で行うと思われていた内容がかみあっていなかったため戸惑った。
- ・担当とは別の人の考え方が違って、どちらの指示に従えばいいのかわからなかった。
- ・ボランティアではなく人手不足解消かつ、あてにする対応があまり良くなかった。

①参加しての感想や活動内容への満足度

参加しての感想や活動内容への満足度については、回答した学生355名中327名で全体の92.1%が「非常に」または「まあまあ良かった」と高い満足度を示していた。すなわち、多くの学生がボランティアに参加したことを「いい経験」として捉えていることがわかる。

②次回に参加したいと思うようになったか

次また何かボランティア活動に参加したいと思うようになったかについては、「ぜひ参加したい」が学生355名中153名で、全体の43.1%であった。そして「できるだけ参加しようと思う」が178名で全体の50.1%を占め、約9割の学生が継続的に取組もうとしている様子が伺える。

③活動に参加しての感想

活動に参加しての感想については、「身近な地域社会のことを知ることができた」が学生355名中164名で最も多く、全体の32.0%を占めている。まさに本学がボランティアを推進するねらいの一つであり、地域社会に貢献できる人材養成という短大の使命を達成する手段となっている。次いで「感謝されたことで、自信や励みになった」が挙げられ、全体の28.8%を占めた点が特徴的である。社会に必要とされる人間として、自分自身のことも大切にすることを学んでくれていることだろう。

④参加しての要望や苦情

受入先への要望や苦情については、「具体的に何をすればいいかの明確な指示や説明がなかった」が学生364名中85名で、全体の23.4%を占め、活動中の困惑や困難さを自由記述にも書き込んでいる。このことについては今後、受入先と事前打ち合わせや情報収集を密に行い、活動先への依頼のあり方を検討していかねばならないことを示している。また、「その他」には221件の書き込みがあり、学生なりの思いが多く綴られているのでこれらを整理し問題点をまとめて、今後の事前指導に生かしていきたい。

学生の自由記述については、子どもから高齢者、障害のある方と対象の違いはあるが、いろいろな方々とふれあうことができた喜び、イベントを実施、運営していくなかで表に出ない裏側の苦労や大変さ、コミュニケーションの難しさ等、一人ひとり学生の視点で書き留めていた。「悪かった点」は反省材料としてボランティアセンターの課題に取り上げ、学生と受入先の双方が納得いく活動となるようにセンター、教職員が連携を図りながら改善に努めていきたい。

4. ボランティア受入先による実施後のアンケート結果

表8 ボランティア受入先アンケートの結果 (単位：件)

1. 学生ボランティアの活動と貢献度	(1)非常に良かった (2)まあまあ良かった (3)どちらともいえない (4)あまり良くなかった (5)とても悪かった 計	40 (74.1%) 12 (22.2%) 1 (1.9%) 1 (1.9%) 0 54 (100%)
2. 学生との今後のタイアップの可能性	(1)ぜひ一緒にやっていきたい (2)何かあればまた検討してみたい (3)おそらくもう頼まない (4)その他 計	42 (77.8%) 12 (22.2%) 0 0 54 (100%)
3. 学生ボランティアに期待された役割 (複数回答)	(1)短大での専門教育を活かした活動 (2)学生らしい活動でプログラムや周囲の参加者の活気を与えること (3)人手不足を補う (4)身近な地域社会のことを知ってもらいきっかけとする (5)その他 計	23 (18.4%) 45 (36.0%) 23 (18.4%) 25 (20.0%) 9 (7.2%) 125 (100%)
4. 学生を受入れての要望や苦情 (複数回答)	(1)期待したほどの専門性が感じられなかった (2)具体的に何をすればいいか明確な指示や説明がないと動けなかった (3)与えられた活動に対して不平不満が見られたり、態度が悪かったりした (4)利用者・職員・その他の来訪者とトラブルやアクシデントがあった (5)その他 計	3 (13.6%) 6 (27.3%) 1 (4.5%) 0 12 (54.5%) 22 (100%)

ボランティア受入先による自由記述

- ・「またボランティアをしたい」と言ってくれたことが、大変嬉しかった。
- ・これからもボランティアを募集していくのでお願いしたい。
- ・今後ともぜひ協力をお願いしたい。
- ・若い学生さんの存在は、施設にさわやかな空気を運んでくれる。
- ・学生の笑顔が印象的であった。
- ・朝早くから精一杯頑張ってくれた。
- ・障害への理解を深めることと、相手に合わせて支援していくことの大切さを学ぶ場にしてほしい。
- ・クッキング、外出を今後も計画するのでお願いしたい。
- ・学生さんに、テントやブースを構え、専門的なプログラムをもって参加してもらいたい。
- ・学生の持ち込み企画の受入れや通常の学童保育のボランティアをお願いしたい。
- ・何らかの形で、学生さんと交流を持てる機会があればと思う。
- ・活動時間より移動時間がかかり申し訳なかった。
- ・事前に活動内容等の連絡や相談を行いたい。
- ・学生と受入先との交流会があるといい。
- ・体が不自由な方への対応など、協力していきたい。
- ・キッズサッカーやキッズバスケットの指導者講習会の実習を幼児教育でできないか。
- ・ぜひ、若い人に拉致や社会問題に取り組んでほしい。
- ・DV防止講演会のポスターを依頼したい。
- ・余暇支援に関わってもらえると嬉しい。
- ・やはり、専門の勉強をしている学生の方などと、安心してまかせることができた。
- ・明るくさわやかで、受け持った仕事はきちんとこなしていた。
- ・暑い中、長時間にわたりいろいろな要望に快く引き受けてもらいありがたかった。
- ・学生ははつらつとし、高齢者への対応だけでなく、小さい子どもの対応も大変うまく行っていた。
- ・施設利用者の社会参加の機会を増やしたい。
- ・学生がもっと余裕を持ってボランティアに参加できるような時間があればよい。
- ・多くの学生にお手伝いできるような活動を提案させてほしい
- ・孫のような学生に関わってもらえることは、利用者にとってスタッフと違った生き生きとした顔の表情が出る。
- ・学校で学んだことを積極的に発揮してほしい。
- ・大学のサークルでの活動を披露してもらおうなどタイアップしていきたい。

- ・1回きりでなく、リピーターになってもらうために、学生の感想や意見などいろいろな指摘を受けたい。
- ・学生の学んでいる専門知識を受入先に教えてほしい。
- ・学生ボランティアの参加の様子をマスコミに取り上げてもらい、活動を広く知ってもらう機会をつくりたい。

学生がボランティアを実施後、受入先からアンケートが返送される。その結果をまとめたものが表8である。アンケートの回収は6カ月で84件であったが、同じ受入先のアンケートの結果は同傾向であったため1件と数え、54件によるものである。

①ボランティアの活動と貢献度

ボランティアの活動と貢献度については、54件中52件、全体の96.3%が「非常に」または「まあまあ良かった」と高い評価を得た。

②学生と今後のタイアップの可能性

学生と今後のタイアップの可能性については、「ぜひ、一緒にやっていきたい」が54件中52件と全体の約78%を占め、受入先の学生ボランティアに対する期待の高さが伺えた。

③学生ボランティアに期待された役割

学生ボランティアに期待された役割で最も多かったのは「学生らしい活動で、プログラムや周囲の参加者に活気を与えること」であった。次いで多かったのが「身近な地域社会のことを知ってもらうきっかけとする」で、まさに本学がボランティアを推進しているねらいの一つであり、学生の社会参加を促す意義が検証されるところである。「その他」の内容には、「親子または祖父母との日常的な姿を見て役立ててもらおう」「仕事に就く前に、教科書では身につけられない現場で学ぶ『生の子ども』を味わってもらおう」「高校生ボランティアにとっては、3歳児とのふれあひ方の良いお手本になる」「納涼祭をともに楽しんでもらおう」等の役割が挙げられていた。

④学生を受け入れての要望や苦情

学生を受け入れての要望や苦情については、54件中22件が挙げられていた。「その他」の要望として「子育てネットワークができたと思われるので、保育現場へ出たときに広げてほしい」「積極性があれば良かった」「元気な子ども達と交流して感じたことは何か。また、どんなことなのか聞かせてほしい」「もう少し利用者と話したり、ふれあったりしてほしい」「関わる時間が少なく、ぎこちない感じが見受けられた」等が挙げられ、中には「一度にたくさんのボランティアを受入れる側の体制を見直す必要がある」とより良い関係に向けて振り返っている受入先もあった。「その他」の苦情としては「指示待ちの学生がいた」「身だしなみに注意してほしい」「学生同士、固まってしまう」「もっとふれあってほしい」等であった。これらは大いに反省すべきことであり、これらの苦情を真摯に受け止め、

ボランティアに臨む姿勢を事前指導で強化すべきであると考え。

受入先からの自由記述については、お礼の言葉や参加要請に関すること、学びの場にしてほしいことや専門性を発揮してほしい等の要望、学生との交流会、学生の意見・感想を知りたい、もっと学生が参加できるような活動を提案させてほしい等、さまざまな意見が挙がっていた。特に、「学生の意見・感想を知りたい」との要望については、今後の活動を継続していく上においても大切なことなので、早急に取り組んでいきたい。

IV 今後の課題

平成20年度から「ボランティア・地域活動センター」を開設し、本学へのボランティア依頼に関することは全て同センターで行い、窓口が一本化された。以前は、幼児教育学科や福祉学科へ施設行事等のボランティア依頼があった場合、各学科で教員1名が専任となって学生の参加募集や施設との連絡調整、学生への事前指導を行い、かなりの負担であったと思われる。この点、センター開設により負担軽減を図ったが、実際のところ次のような新たな課題が生じている。

- (1) パソコン操作を苦手とする学生への対応
 - ・ Webボランティア手帳に登録していない学生がいる。
 - ・ I Dコードがわからない学生がいる。
 - ・ 携帯電話とWebボランティア手帳がつながっていない。
 - ・ 事前指導で連絡を取りたくとも連絡が取れない。
- (2) Web履修登録とWebボランティア手帳登録を混同している学生がいる。
- (3) Webボランティア手帳の書き込み・実施後のアンケート未記入
 - ・ ボランティアに参加していても、Webボランティア手帳の書き込みや実施後のアンケートに未記入の学生がいる。催促メールの配信という問題も生じ、また、ボランティア手帳に書き込みしないとボランティアに参加した履歴が残らない。
- (4) 教員によるWebボランティア手帳記入者の割当
 - ・ ボランティア依頼の数が増えてくると、Webボランティア手帳にコメントやアドバイスを書き込んでもらう教職員の割当が煩雑になり、担当回数によってはこれまでになかった負担感を生む懸念もある。
- (5) センターと教職員との協力体制
 - ・ Webボランティア手帳の他にボランティア募集依頼の用紙も掲示しているので、センターと教職員との協力体制を図り、以前からの継続ボランティアを断ることのないよう広報を強化していく必要がある。

V まとめ

今回、平成20年4月～9月までの「請負型」ボランティアについて、参加状況を調査した結果、以下のことが明らかになった。

平成20年4月～9月までの6カ月間で、ボランティアの依頼件数は232件中「請負型」は225件に対し、参加件数が99件で参加率は44.0%であった。依頼件数が最も多かった月は8月で87件あり、参加件数も同じく8月が最多の43件で、この時の参加者数は延べ130名であった。

ボランティアの種類は、活動対象・活動場所・活動内容によりさまざまであるが、最も依頼の多かったものは「市民向けイベントの運営補助」関係で、全体の約40%を占めた。これに伴い参加件数も同ボランティアが多く、参加者数についても同傾向で全体の約50%を占めていた。

学科別参加状況については、学科により多少の違いはあるものの、4学科1専攻全てから参加がみられる。参加率では、延べ人数でみると60%に達するが、厳密に参加経験者を数えた場合の参加率はおよそ36%となるため、学生はボランティアを1回は参加、経験するよう主体的な取組みを願うものである。

今回の調査を終え、本学におけるボランティア活動が、急速な変化をもって全学的な体制で取組まれていることが明らかになった。参加率はまだまだ十分ではないが、実際参加した学生の多くは対人関係でのいくつもの学びと、行事やイベントを運営していく難しさや工夫を体感し、実社会を知る機会になったと思われる。受入先での貢献度も高く、さらなるタイアップに期待が寄せられている。地域社会に貢献するという短大としての使命や、学生を社会から求められる人材として育てる期待に応えるためにも、明確になった課題を早急に検討していきたい。また、「ボランティアの手引き書」の作成から着手して、ボランティア活動への理解と関心を高め、もっと多くの参加機会を提供し、学生の人間力向上に向けさらに取組みたいと考える。

参考文献

- 1) 富山短期大学「平成19年度『新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム』申請書」2007年
- 2) 宮田伸朗「福祉人材養成教育と「G P」～専門性と人間性の統合的形成～」富山短期大学紀要第43巻（1）2008
- 3) 角田礼三 「ボランティア教育のすすめ」明治図書出版
- 4) 佐々木正道「大学生とボランティアに関する実証的研究」ミネルヴァ書房
（平成20年10月31日受付、平成20年10月31日受理）

